

# 史跡万富東大寺瓦窯跡発掘調査現場公開資料

岡山市教育委員会

日時：令和3年7月3日（土）

場所：岡山市東区瀬戸町万富（発掘現場）

## 〇はじめに

岡山市教育委員会では、史跡万富東大寺瓦窯跡の発掘調査を5月中旬より実施しています。このたび調査も終盤に入り、発掘成果を公開する運びとなりました。今回の調査は大寺山地区の南側において、窯の正確な位置や規模、また未知の遺構の検出を目的として行っています。その結果、新出のものを含め9基の瓦窯を確認するに至りました。

## 〇遺跡の概要と調査の経緯

史跡万富東大寺瓦窯跡は、岡山市東区瀬戸町万富に所在しています（図1）。今から約800年前の鎌倉時代初頭、俊乗坊重源が主導し東大寺再興のための瓦を焼いた窯跡として著名であり、昭和2(1927)年に史跡の指定を受けています。遺跡は大寺山地区と上の山地区に分布しており、昭和54(1979)年に岡山県教育委員会、平成13・14(2001・2002)年に瀬戸町教育委員会により発掘調査や科学探査が行われています。その結果、少なくとも14基以上の瓦窯が存在することが分かり、管理棟と考えられる礎石建物や工房などの関連遺構がみつかっています。



図1 遺跡の位置と調査区の位置

現在、岡山市教育委員会では史跡の保存と活用のための史跡整備を計画しており、それに係る発掘調査を今年度から継続して実施する予定です。過去の調査との整合性を確認しつつ、指定地内の解明されていない部分の発掘を行いながら、遺跡の全容把握に努めていきます。

## ○調査成果の要旨

今年度は斜面地に南北にのびる調査区(トレンチ)を設定しました(図2)。過去の科学探査で瓦窯の存在が指摘されていた場所を中心に発掘すると、地中にあった瓦窯があらわとなり、その大きさや構造を知る手がかりを得ることができました。

今回、一番残りが良かったのが北端の10号窯になります。瓦窯は焼成室(長さ約2.6m・幅約1.3m)、燃烧室(長さ約2.0m、幅最大1.6m)、焚口といった各部から構成され、他に検出できたものも合わせ、有牀式(ゆうしょうしき)平窯と呼ばれるものとなります(図3)。このタイプの窯は焼成室に分焰牀(ぶんえんしょう)を設け、火の通りを効率化しています。窯といえば登窯をイメージされるかと思われませんが、有牀式平窯は奈良時代から採用され始め、瓦生産と深い関わりがあります。史跡内の瓦窯は2条から4条の分焰牀をもっており、今年度の調査では2条のものが大半を占めます。壁面にみられる足掛け状の段、分焰牀の高まりを利用しながら、焼成室内に瓦を列状に立てならべ焼いたものとみられます。焼かれた瓦は平瓦がメインとなりました。瓦窯の中には、幅が狭まり、床や壁に補修の痕跡がみられるなど、つくり替えながら使用されたものがあることも確認できます。

面的に調査を行うと、瓦窯群がどのような変遷を経て築かれたかという問題にも触れることができます。例えば、瓦窯の主軸は7号窯を含めた北側の窯と、その南側では方位に振れが生じています。また、現地の土層の観察では10号窯周辺では本来の自然地形を厚みのある盛土で整地した後、瓦窯を築いていることが分かります。このように構築のあり方によって複数基の瓦窯をグループ化した上で時期差を考慮できる可能性があります。加えて、出土遺物である平瓦の製作時につくタタキ目パターン(図5)に注目すると、盛土内に混入する個体、窯体や分焰牀に使用される個体、焼成不良品を廃棄した灰原の個体を比較して特徴に差がみられる場合、瓦窯の新旧関係を検討するヒントとなります。現在までのところ、調査区内では北から南へ窯の場所を移しながら、瓦生産が行われたと考えられます。

その他、遺物として軒丸瓦や軒平瓦、丸瓦、「東大寺」の刻印をもつ平瓦に加え、土師質土器、備前焼、硯片などが出土しています。これらの中には相対的な年代が分かるものが含まれ、丁寧に整理することで瓦窯群の操業時期を絞っていきます。その期間を短期的、長期的に見積もるかは今後の課題となります。

## ○まとめ

関連する文献資料を有する遺跡ですが(表1)、考古学的なアプローチを生かした調査を行い、実際の操業の推移と照らし合わせる作業が必要です。その結果として、新たな知見も得られ、史跡の整備にも生かされると考えられます。来年度以降も、史跡内の遺構の構成や分布を明らかにするための調査を行う予定です。その際は窯跡だけではなく、生産遺跡として周囲を取り巻く当時の土地利用の状況を踏まえることも重要です。

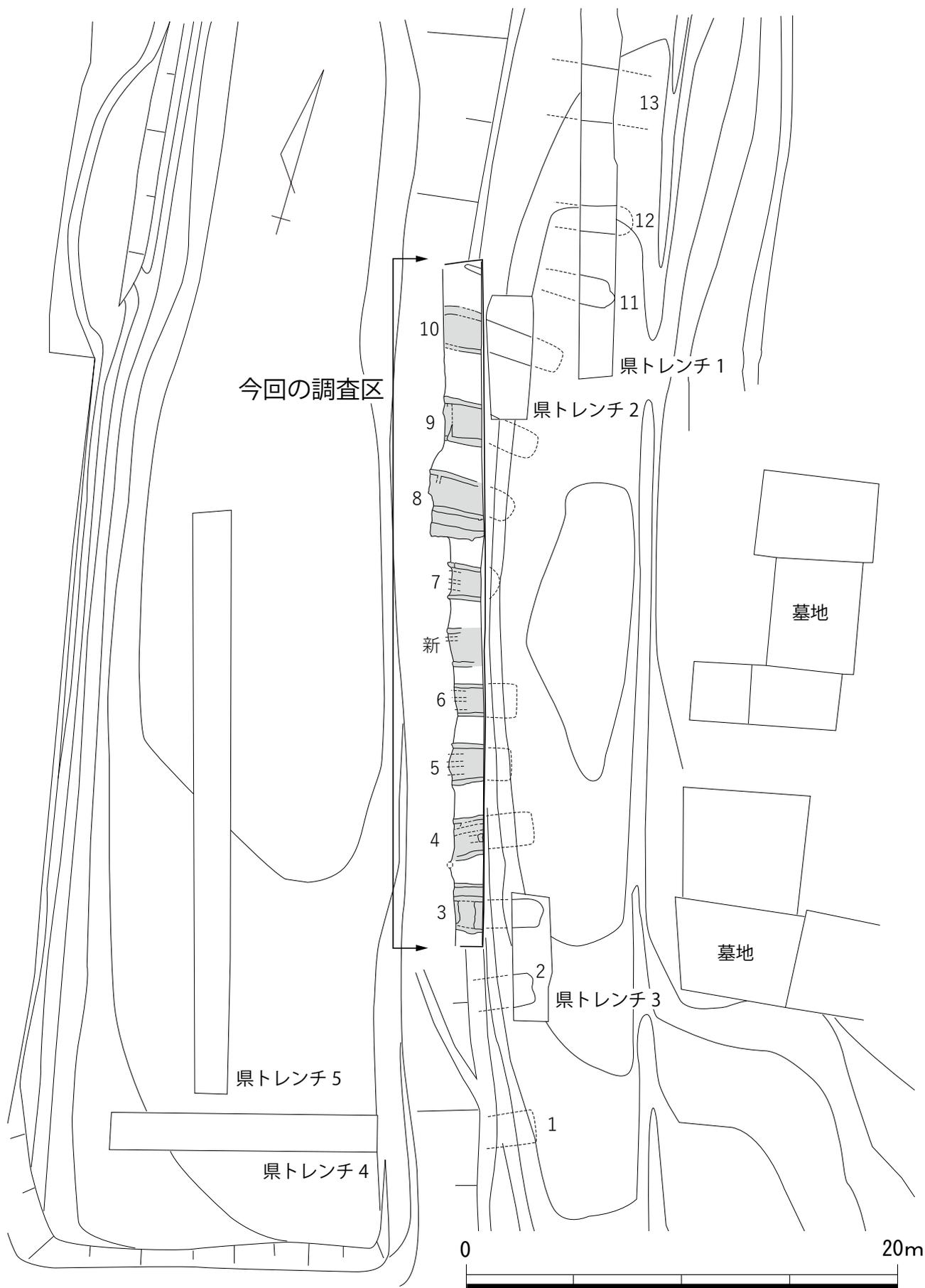


図2 調査区の配置と瓦窯の分布

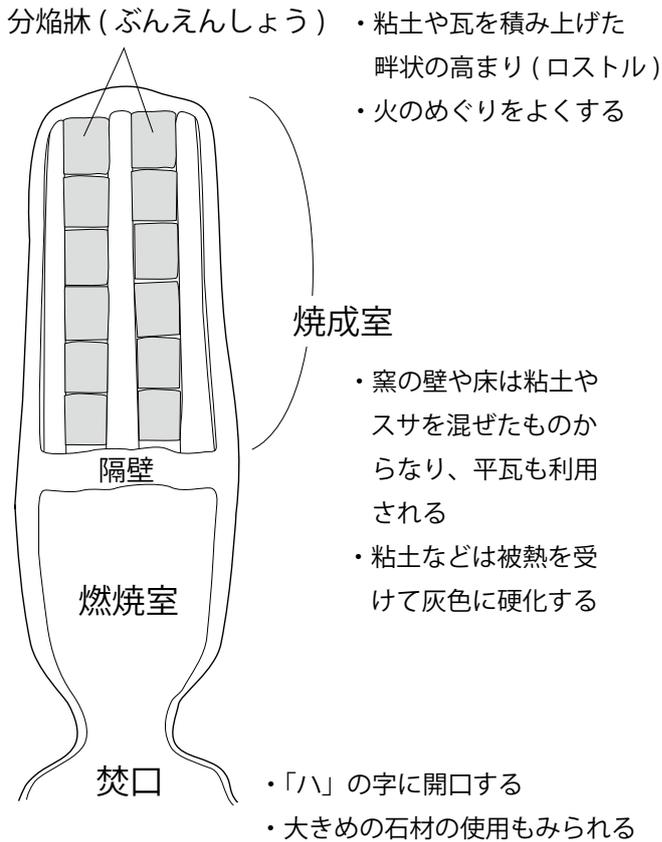


図3 有牀式平窯の各部名称

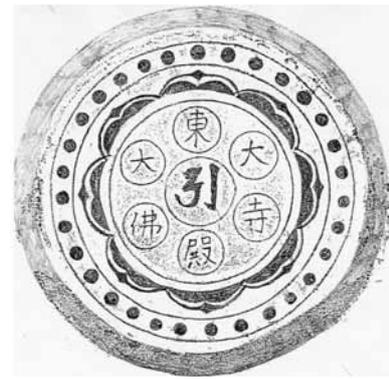


図4 軒丸瓦の瓦当 (復元)

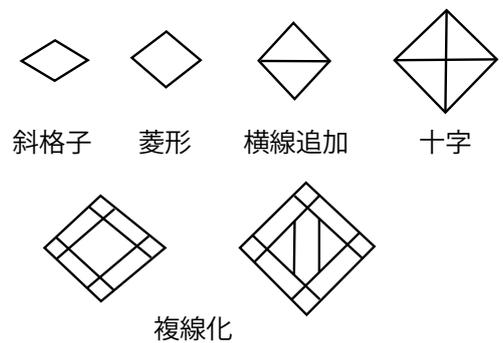


図5 平瓦タタキ目文様模式図

西暦	和暦	事項
1180	治承四	源平の争乱で東大寺が焼ける。
1181	治承五 養和元	重源、造東大寺勸進職に任命される。東大寺大仏の螺髪を鋳始める。 平清盛が死去。
1185	元暦二 文治元	「壇ノ浦の戦い」平氏が滅びる。 東大寺大仏開眼供養。
1186	文治二	周防国が東大寺造営料国となる。翌年より、杣から木材を切り出す。 重源、周防国に向いその帰途、備前国に立ち寄る。
1187	文治三	この頃、重源、周防阿弥陀寺創建。東大寺浄土堂を建てる。 重源、備前国荒野開発を願出、その妨害停止を奏上。
1190	建久元	東大寺大仏殿上棟。
1192	建久三	後白河法皇が死去。
1193	建久四	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる。この頃、備前国の荒野を開発。
1195	建久六	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。後鳥羽天皇、源頼朝が参列。 重源、大和尚号を得る。
1196	建久七	東大寺領の備前国荒野を同野田荘との交換が認められ不輸地となる。 宋の石工・伊行末等、東大寺大仏殿の石の脇土像、四天王像、中門の石獅子などを造る。
1197	建久八	東大寺大湯屋鉄湯船を造る。東大寺戒壇堂、八幡宮の造営。
1199	建久十 正治元	東大寺南大門の上棟。源頼朝が死去。 東大寺法華堂を修造。
1200	正治二	東大寺開山堂を修造、尊勝院再建。
1203	建仁三	東大寺南大門の仁王像、運慶・快慶らにより造像。 東大寺総供養。重源、活動の実績を『南無阿弥陀仏作善集』にまとめる。 『備前国麦進未進並納所下惣散用状』に万富産の瓦を示す「吉岡御瓦」の字句あり。
1204	元久元	東大寺東塔の造立を開始。
1206	建永元	重源、東大寺浄土堂で死去 (86歳)。

表1 東大寺再建関連年表